

森田草平

スウイフトと漱石



# スウイフトと漱石



## 一

最近私は小泉信三氏の『夏目漱石論』をおもしろく読んだ。氏の読書余録のおもしろさは氏の人柄によるものだと思うが、私は氏の昵近じっきんされた福沢翁のことを書かれたときからおもしろく感じたと同じように、今度はまた私の昵近した漱石先生のことを書かれたからとくにおもしろく感じたのでもあろう。私どもはあまりによく先生

を知っているために、かえって小さなところに目が眩んで大体を捕捉することができない。ところが、小泉さんは遠く離れて外界から漱石を見ていられる。そこがおもしろいのである。

たとえば、氏は漱石がなにごとにも一理屈ひとりくつこねなければ承知のできない例として、先生が洋行の際、インド洋で船室の中に寝ていられると、小さな窓からちらと星の光が見えたと思うと、瞬時にしてまた消えたと書いてきて、そのあとに「船の動揺激しければなり」と付け足している。これなぞはよい例だとしていられるが、そうい



う例なら、私も別にもう一つ挙げることができる。

『三四郎』の中にいや味の弁がある。いや味はいや味だ。説明されなくともわかってると思っていながら、私など取り立てて考えてみたことはない。あれほどいや味を排斥した当時の俳壇にも、それを説明した人はほかになかった。しかるに漱石先生は広田先生の口をかりて、次のように説明してられる。いわく「アメリカ人は金もうけが好きで金もうけに専心する。それは善でも悪でもない、もちろんいや味ではない。美服をまとうこと好きな人が好んで美服を着る。それも決していや味では

ない。ただ美服を着て、それを他人に見せびらかすような下心を蔵するときいや味になる。要するに、一つの目的の下に他の目的を隠しておれば、それはいや味になりがちだ」と。説ときえて、まことに理義明白である。なるほど、この定規を当てはめてみると、いや味かいや味でないかはたちまちわかる。婦人に対して親切であるのはいや味じゃないが、相手に気に入られようとするような下心があつたら、もういや味だ。

この理屈好きな漱石は、文芸批評となるといつそうそうなつて、しかもそれが自家独特の理由によつたもので



なければ承知ができない。それがために先生は『文学論』を書いて、文学の根本原理をも究明せられた。そういう場合、漱石がいかに他人を踏襲することをきらい、自家の個性を發揮しなければやまなかつたかを説いて、小泉さんはまたおもしろい例をあげていられる。いわく、『文学評論』の中に、漱石はデフォーの『ロビンソン・クルーソー漂流記』がいかに冗じょうちよう長でおもしろくないかを、その理由をあげて丹念に説明しているが、昔から、ある作品なり作者なりのいかにおもしろいかを説明したものはいくらかもある。しかしそのおもしろくないゆえんを漱

石のように事明細に、しかもおもしろく説明したものはかつて見ない。おそらくは漱石をもつて嚆矢こうしとしようと、まずそんなような意味のことを言っていていられた。実は、漱石先生の『十八世紀文学』は私が先生の講義から書き直させてもらったものだから、その内容はよく知っている。小泉さんの指摘されたような事実もまんざら気がつかぬではなかった。しかし「おもしろくないものをおもしろく批評した。それが漱石の傾向のあらわれである」とまではつきり言いきることは、私にはできなかつた。先生に捕らわれていたからである。

最後に小泉さんは、たいていの作家はその若い時代に、自分がどうしてこういう名作を成しうるか。その因<sup>よ</sup>つて来る理由を知らないで、ただ天才の導くままに名作を成すのが普通である。しかるに漱石はまず文学の理論を研究して、それを十分に承知したうえ、比較的晩年から創作をするようになった。これは作家としてもめずらしいことであると言っていた。漱石先生が大学の講義をしてから、三十七、八歳になって、はじめて創作の筆を執るようになったことは、たいていの人の知るところである。しかも、とくにその点に着眼した者はやはり小泉

氏を初めとしなければなるまい。なお氏はその点からかして、「漱石はすでに文学の理論を知り、その構成を熟知したうえ創作に従事したのだから、その作にはどこか作為の感を読者に与えることを免れえない」とも言われている。これも私は至極同感である。先生はしじゅう「こしらえ物でも、こしらえ物でないもの以上に自然にできていけばいいじゃないか」と言っていていられた。まったくそのとおりであり、先生の作にはまたそのとおりに行きたものもある。しかし、どこか自然の模写とは違っていた。

要するに、小泉さんの言われたことはなんでもないことだ。誰でもそう思っていたことだとも言われよう。しかし、その誰でもそう思っていたことを、小泉さんがはじめてそう言われた。私は弟子としてそれを感謝せずにはいられない。

## 二

私もずいぶん漱石先生について書いたものだが、これまではただ先生の思い出ばかり書いていた。批評がまし

い筆はほとんど執ったことがない。私も今年六十八歳、先生よりも十八年生き延びている。五十歳といえ、私から見れば小僧ツ子のようなものだが、先生のことを想うたびに、いまでも私のほうがずっと小僧のような気のしていることは、毎々言うとおりに。一生頭が上がりな。先生の思い出に生きて思い出に死んでいく。私などはまあ「永遠の弟子」のいい標本である。

ところが、このごろになって、ほんの少しばかり先生を離れて見ることができるような気がしてきた。『漱石先生と私』に思い出の総浚そうぎらいいをしてしまつて以来のこと

である。離れて見るといっても、先生を批評することができるという意味ではない。ほんの少しばかりこれまでとは違った角度から先生を見るといったくらいのもので、ここに述べさせていたただくものも、その一例である。

戦災にすっかり書物を失くした私は、終戦後のつれづれに友人から『ガリバー旅行記』を借りて読み直してみた。新しい書物も手に入らないし、またそれを読むだけの根気も失っていたのと、もう一つは先生が『十八世紀文学』（『文学評論』）の中で、デフォーを平凡人として貶へんしていられるのに反し、スウィフトのことは、「すべて



の人の不満足がみな満足の対照を持った不満足であるの  
に對して、スウイフトのそれはそういう対照を持たない  
不満足である。その冷氣は骨に徹して、あたかも氷塊氷  
雨を吐き出す噴<sup>ふん</sup>火孔<sup>かこう</sup>を見るようだ」と、なんだかこう先  
生自身のことでもあるように、他人<sup>ひとごと</sup>事ならず書いていら  
れる——そこにかねがね私も興味を持っていたから、も  
う一度スウイフトの方面から先生を眺めてみたいと思っ  
たのである。で、読み返してみると、たしかに読み返し  
ただけのことはあった。どうして若い時にはこんなところ  
ろに気がつかなかったらうと思うほど、私としてはいろ

いろいろの発見をした。もちろん、先生のように身をもつてスウィフトに同情することは、先生のような素質を持つて生まれてこなければできないことではあろうけれども。

思うに、漱石先生くらい洋行中じがなみじめな生活をした人はほかにたんとあるまい。鷗外先生のこととはよく知らないが、陸軍省から派遣されたのではあるし、『舞姫』や『文づかい』なぞを見ても、日本の留学生として、めずらしがられ、あちらの華胄社会かちゆうの人々とも交際して、かなり派手な、同時に愉快的な生活をしていられたように

想像される。弟子の寺田さんですら、同じく文部省の留  
学生ではあるが、ドイツ一流の学者について、えいさい 穎才ある  
あちらの若い研究生どものあいだに立ちまじって、一歩  
もおくれを取らず、きわめて愉快に研究をつづけてこら  
れたようだ。寺田さんの日記を見ると、その研究の日々  
がおもしろくてたまらないように書いてある。たとえば、  
ある日寺田さんが実験中の試験管（？）きりゆうさん かなにかを、あ  
やまって稀硫酸きりゆうさん かなにか（なにかづくしで恐縮だが）を  
いっぱい入れた、大きな瓶かめ の中に取り落とされた。さあ  
困ったと思われたが、幸い傍らに細長いガラスの管が何

本もあつたので、その二本を箸のようにして、器用に稀硫酸の中から例の試験管をすくい出してしまった。おりから廊下を通りかかった教授が、そのありさまを覗いていたとみえ、いきなり扉を排はいしてはいつてきて、「おい君、いまやっていたことをもう一遍やって見せてくれ」と言ったという話がある。この日本人独特の器用さ——だけではあるまいが、その機敏な持ち前で、実験でもなんでも要領よくさっさとやってのけることが、鈍重で不器用なドイツ人のあいだでは、大いにハンディキャップともなれば、持てはやされもするらしい。鷗外先生もそ

んなことを書いていられたように思う。

これに反して、漱石先生のロンドン生活は実につまらぬ、おもしろくもない日々であった。だいいち金が乏しい、留学費のほか一文も支給されるあてはなかった。

大学教授の講義は、文学と科学との相違はあるが、聞いてもつまらぬというので、一時はロンドン<sup>いちじ</sup>大学に席も置かれたようだが、まもなく通うことはやめてしまい、ただクレীগとかいう沙翁のエディターを招いて、一週一回その講義を聞くに止められた。そして、限られた留学費の中からできるだけたくさん書物を買って帰ろうとい

うので、極度に生活費を切り詰め、わびしい素人下宿の一室に閉じこもって、誰とも交際しない。外人と交際するには金がかかるし、日本人と付き合ってもつまらぬというのだ。もつとも、交際用として、最初モーニングを一揃いと靴と帽子もロンドンで新調されたようだが、すぐに後悔していられる。

で、毎日下宿の婆さんと喧嘩ばかりしていられた。もちろん、先生の一人角力ひとりずもうで、内訌ないこうした肚はらの中の喧嘩である。まあ先生のロンドン生活中私どもが読んでちよっとほほ笑まれるのは、先生が自転車に乗る稽古をして、で

つかい巡査に笑われたことと、下宿の女中のヘッジ・バートンのおしやべりに閉口された話ぐらいだ。素人下宿の主人夫婦が借金に首がまわらなくなつて、夜逃げ同様に場末の借家に移転する際先生にもいっしよに移つてもらえまいかと相談すると、先生も他所を捜してもないものだからやむを得ず承諾された。すると、夫婦は非常に喜んでいよいよ移転する時先生が手に提げていられた風呂敷包み——その中には着古した浴衣ゆかたの寝巻と穴の開いた靴下とが入れてあつた——を、お上かみさんが「私が持ちましよう」と言つて持つてくれた。これがまあロンドン



で先生の婦人に持てた唯一の記念といってもよろしかろう。

先生の作『カーライル博物館』は読んでおもしろい。しかし入場料は廉やすかった。『倫敦塔』はかなり派手でもある。しかし、要するにお上のぼりさんのロンドン見物のひところまである。

### 三

こうして先生はまったくロンドンの社会から孤立し

て、ちようど離れ小島へひとり漂着した難破船の乗組員のような恰好かっこうで生活していられた。それは『ガリバー旅行記』の主人公が小人国へ、大人国へ、浮き島へ、さらにまた馬の国まで押し流されていったのと、その境遇が似ていはしないだろうか。ただしガリバーは最も適応性の強い人物で、すぐにその国の言葉をおぼえ、しまいは馬の言葉まで話すようになって、その国の内部に入り込み、政治や戦争のお役にまで立とうとはしているが、なにぶんにも身体が自分の数百倍もあるとか、数百分の一にも足らぬとか、馬が人間で人間が馬であるとかいう

ような自然の条件に制約せられて、やっぱりその国の社会からは孤立している。要するに天涯の孤客である。そしてその天涯の孤客たるの眼をもつて、その国の社会を、政治を、住民の生活を眺めている（もつとも、それはイギリス人と当時のイギリスの政治、経済にほかならないのだが）。同じように漱石先生も孤立した漂流人の眼をもつてロンドンの生活を眺めていられたのではなからうか。ただ先生はイギリスの社会の各層を知る機会を持たれなかったから、倫敦を題材として『新ガリバー漂流記』を書くことはできなかつたけれども。

ガリバーは大人国たいじんこくへ漂流して、その国の王妃からおもちやのようにかわいがられ、比較的安楽な生活を送っているが、その心中は孤独であり、その生活はヘルプレスであった。ある日王妃に抱き上げられて、いっしよに鏡にうつったとき、自分の姿のいかにも小さく見すぼらしいのを見て、大いに悲観している。私はそれを読んで、先生がしじゅう言っていた、ロンドンを歩いていると、自分ひとり身丈せいの低く、顔色の黄色いのが気になる。あるとき廊下を歩いていると、向こうから自分と同じような矮小わいしょうな奴がやって来るのを見て、ここにひとり自

分の仲間がいたと喜んだが、だんだん近づいてみると、それは鏡に映った自分の影であつたという話を思い出した。同時にまた先生が帰朝してはじめて神戸に上陸したとき、自分はひとかど白人になりすましたような気で、日本人の顔がどれもこれも黄色く見えてしようがなかつた。街<sup>がいじょう</sup>上に張られた電信柱も倒れて来そうで、あぶなくてしようがなかつたという話を聞いていた私は、ガリバーが本国へ帰って、まだ小人<sup>しょうじんこく</sup>国にいるような気持ちで話をするのに相手を摘<sup>つま</sup>み上げてやろうとしたり、大人国の人間になつたような了簡で、女房と接吻するため、

その足もとへしやがんでやったりする光景をなるほどと合点したものである。

『ガリバー旅行記』の中から、先生の書かれたような、もしくは平生ふだん言われていたような言葉を拾い出そうとすれば、ほかにまだいくらかもある。先生はなによりも強制ということがきらいであった。他人を強制することもきらいなら、強制せられることもきらいであった。個性を重んじ、独立不羈ふきを望んでやまれなかったのは、そこにある。すると、『ガリバー』の馬の国にもちやんとそれが出ている。馬の国はガリバー、換言すればスウィフト

の理想国である。したがって馬に強制はない。いやしくも理性を持った動物であり、理性によって行動しているかぎり、おのずから規矩準きくじゆんじよう繩じように適かなっているので、法律も要らない、強制というようなもののあるべきはずがないというのである。先生はまた「他人と会談するのになにかしらしじゅう口を利いていなければ気がすまない」というようなのは、かえって気づまりだ。しばらく黙って相対していても平気なようなのがよい。寺田がそういう男だよ。あいつはここへ来て、二時間ぐらい黙ってぼくの前に坐っていて、そのまま帰ってしまう。あれでい



「いのだ」というようなことをよく言われた。ところが、『ガリバー』の馬の国にちやんとそれが書いてある。「しやべることはすべて、話す者も楽しければ、聞くほうでも気持ちがいい事柄ばかり。相手の邪魔もしなければ、退屈もしない、興奮もしなければ、意見の衝突もない。何人が集まった場合には、むしろときどき黙るほうがかえって話の興を添えるものだということをも馬どもは知っている。これは事実そのとおりだ」と。

ガリバーが馬の国にも留とどまれない事情になって、ひとり小舟に乗ってその国を去ったとき、彼はもう再びヨー

ロツパへ帰って、あの墮落したヤフー（人間）どもの中に交って生活することがいやでいやでたまらない。どこか無人島へ漂着して、そこでひとり住みたいものだねがと希っている。先生もよく無人島のことを口にされた。無人島には道德の必要もなければ、法律のわずらわしさもない。「無人島にひとりで住んだら涼しかる」というような俳句まで作っていられる。その句は明治二十年代のものだと思ふから、そのころはもう先生は『ガリバー』を讀んでいられたに違いない。しかも、熟読味讀していられたといつて、先生がスウィフトのまねをせられたとい

うのではない。期せずしてふたりの性がよく合ったもの  
だと思っただけである。

ガリバーがポルトガル船に救われて、再びヨーロッパ  
へ連れ帰ろうとせられたとき、彼はそれをいやがって、  
何度も海の中へ飛び込んでまで遁れようとする。とうとう  
う一室に監禁して、無理やりリスボンまで連れ帰られた。  
漱石先生も神戸へ上陸せられたとき、誰か迎えに行つて  
連れて帰らぬと、夏目などどこへ行つてしまふかわから  
ぬと心配せられたものだと聞く。もつとも、これは先生  
の気が触れたなぞと文部省あたりで評判を立てられたか

らではあるが、ガリバーもあまり人をしてこずらすので狂人だと思われていたことはまちがいない。

いよいよロンドンへ帰ったが、女房や子供もヤフー（人間）の仲間だといい、とくにその体臭がたまらないというので、きらって食事もともにせず、仔馬を二疋飼ってその生長を楽しみ、しじゅう厩舎うまやにばかり行って、馬と話をして暮したといわれる。帰朝後の漱石先生にもそういう傾向はなかったか。どうもないとは言われないうように私には思われるのである。

## 四

漱石先生はその『文学論』の序に、「英国留学中は虎狼ころうの群れに交わるむく犬の思いをして生活していた」と述懐していられる。これはあまりにひどい、先生としても激越にすぎると思われんでもない。しかし、先生留学中の実況を知り、その孤独でヘルプレスな生活を想いやれば、先生としては確かに実感であった。先生はその以前四国の松山中学へ赴任された。そのときは確かに小人国へ渡ったガリバーの想いをされたことであろう。イギリス

スでは大人国へ渡ったガリバーの手頼りたよなさを経験された。そして、帰朝後も同じくその手頼りない思いを持ちつづけていられた。先生の神経衰弱は昂進こうしんするばかりだ。そして、その神経衰弱のはけ口が『猫』であつたことは人の知るところである。

だいいち、猫がものを言い、人間のようにものを考へて人間批判をするということからして、偶然の一致ではあろうが、馬が理性的動物としてその国の主権者となり、人間が蛮性ばんせいに返つて馬のように使役されるといふ、『ガリバー』の趣向をもつておりはしないだろうか。私はあ

えて先生が『猫』を想いつかれたとき、『ガリバー』を想い出されていられたろうとまでは言いきれない。しかし、潜在意識として、その識域しきいきか下にあつたろうような気はするのである。実際スウィフトにしても先生にしても、よほどの神経衰弱患者でなければ、あんな飛び離れたことは想いつかないであろう。

『ガリバー』の浮き島の条では、首都の学士院で多くの学者がいろいろな研究をつづけている。ある者は胡瓜きゅうりから日光を抽出する方法を八年間もつづけて研究しているし、ある者は排泄物をもとの食料に還元する方法を研究

している。そのために、その学者は毎週一回都の組合から大樽に一杯ずつの糞尿を供給されているというのだ。そのほか家屋を建築するのに上から建てて土台に及ぶ方法、蜘蛛の巣から繊維を取る方法、空気を凝結させて固形物にする方法、馬の蹄<sup>ひづめ</sup>を硬化させて蹄鉄<sup>ていてつ</sup>代わりにする方法、最も奇抜なのはアルファベツトをパーミテーションの方則に従って排列して、その中から意味のない文句を取り去り、それによって、あらゆる思想と詩歌<sup>しいか</sup>文学とを、天才の出現を待たずして器械的に発見しようとするなど、二十幾種にわたる新しい企画があげてある。こ



れらはもちろんスウィフトが学者の迂愚うぐを嗤わらうためにあ  
げたものだが、こんなばかばかしい考案を誰がはじめて  
発明したかといえは、ほかならぬスウィフト自身である。  
ばかばかしいことをばかばかしいと承知しながら、どこ  
までも自分の考えを追うていくところに神経衰弱の特徴  
があるのではなからうか。

ついでながら、スウィフトはよく糞尿のことを書く。  
小人国では、ガリバーは王宮の火事を自分の小便で消し  
留めて、大功を樹たてながら王妃の忌諱きいに触れた。大人国  
では、途上の馬糞の中に落ち込んで、糞まみれになった。

大便からまず胆汁で染まった色素を取り去り、臭気を放散させ、浮渣ふさの分泌物をすくい取って、もとの食物に還元するというにいたっては、最も汚らしい。この汚らしいことを好んで書くところに、晩年スウィフトの精神異常の状態に陥おちいった特徴が早くもあらわれているという人もあるそうだが、あるいはそんなことも言われるかもしれない。

そういう考案としては、『猫』には例の首縊くびりの力学と、寒月の玉擦たまりの一条があるだけである。しかも、前者は別として、後者は決して無用の研究ではない。ただ

いささか人の意表に出るところが似ているばかりである。糞尿の話にいたっては、私は先生からそういう譬諭ひゆで小ツピどくやられたこともあるが、好んでそういう、譬諭を用いられたという形跡もないから、ここには略しておく。

『猫』についてはこれくらいにしておいて、次には『坊っちゃん』に移りたい。『坊っちゃん』はやはり先生の帰朝後、『ホトトギス』に連載された『猫』の終わるころに書かれたものだが、そのモデルになったという松山へ先生が赴任されたのは、それより十年前のことである。

なにしろ箱根の向こうは狐やむじなばかり棲すんでいると  
思い込んだ江戸者が（そう言ったのはもちろん作中の婆や  
だが）、はじめて四国くんたりまで出かけたんだから、  
これはちよつと島流しに遭あったような気がしたかもしれ  
ない（先生自身はそう思われなくとも、坊っちゃんはその  
思った）。もつとも、『坊っちゃん』の主人公は、ガリバ  
ーの融通性のあるのとは違って、直ちよくじょうけいこう情径行、まったく  
一本気の男である。しかし、こちらを理解してくれない  
点にかけてはまるで異民族も同様な田舎漢いなかもものの間にひとり  
で放り出された坊っちゃんは、必ずや大人国たいじんこくへ渡ったガ

リバーのような、ヘルプレスな思いをしたに違いない。大人国では、ガリバーは捕つかまえられて見世物に出され、子供には石を投げられ、たまたま王妃の寵ちようを受けるとなっても、人間とは見られず、小動物として取り扱われ、しじゅう踏みつぶされはせんかとびくびくして生活するあたり、もちろん違うことは違うが、いささか生徒にからかわれたり、下宿の婆さんから芋いもばかり食わされていいる坊っちゃんを思わせるものがありはせんか。いずれにしても先生は、ガリバーと同じように、まったく松山の社会の外に立って、松山の社会と住民とを観察し

ていられる。とくにこの点から見て、私は『坊っちゃん』を先生の新しい『ガリバー旅行記』であるとしてみたい。

## 五

先生はその『文学評論』の中に、「スウィフトの一生を知るほかに、スウィフトを理解する道なし」という意味のことを言っていられる。ここで一大飛躍をすること許されるならば、先生があれほど深くスウィフトを理解していられたということは、自分もスウィフトと同じ

ように、いつかは普通ならぬ状態に陥るべきエレメントを蔵<sup>ぞう</sup>するものとして、絶えずその前におびえながら、白<sup>みずか</sup>らの精神の崩壊していく有様を見つめていられた——少なくとも、そうした危険を自覚していられたからではあるまいか。実際、同病相憐れむというような切なる共感がなければ、ひとりの作者を本当に理解することができないものではあるまい。つまり肉体の共感によって相手を肉体的に理解してこそ、はじめて精神的にもその作者を理解したと言いうるのである。先生のスウィフトに対する考察は、ほとんどスウィフト自身が考えている以上に

痛切であり、深刻である。あれはもう先生はスウィフトについて言っていていられるのではない、スウィフトをかりて、自分自身について言っていていられるのだとしか、私どもには思われない。

こういった推定を下すことは、弟子のひとりとして私にはさすがにはばかれもするし、したがって固くなりもする。しかし、そうした病状の予感については、先生みずからすでにイギリス留学中その夫人にあてた書簡において、はっきりと言明していられる。それはまあ神経衰弱の昂進した際における疑懼ぎぐと恐怖の念から出たもの



ともいわれよう。が、その疑惧と恐怖の念は、帰朝後に  
おいても、いよいよ昂進こそすれ、しょうせき軽減した証跡は見  
られない。私は科学者でないから神経衰弱症と、それ以  
上のものとの間の区別を立証することはできないが、あ  
の先生にして自分でも制御することのできないような精  
神状態に陥られることは、私どもの知っているだけでも、  
時たまあった。そして、それは先生の書かれたものでも、  
お子さん達に対する仕打ちでも、歴々として指摘するこ  
とのできる場所である。しじゅう「おれを狂人だとい  
うなら狂人になってやる」と威張っていられたなぞも、

半ば狂人であることを自覚したジムプトローメだと言わば言われぬこともない。もちろん、それは一時的なもの  
で、先生は常にその陰惨な状態から回復して、平生ふだんの明朗を取り戻された。そして、死期に際しても、ノーマルな状態で天命を終えられたのである。が、私にはどうしてもそれが単なる神経衰弱以上のものではあつたような気がしてならない。しかし、私に興味があるのは、もちろん先生の病症そのものではない。どうして先生がああ執拗な病状と闘いつづけられたか、いかなる意力によってそれを征服されたかという点である。

先生は、ニーチエも、ドストエフスキーも、モーパッサンも、非常によく理解していられた。三人ながら瘋癲ふうてん患者かんじゃである。スウィフトを加えれば、四人である。しかし、先生はニーチエもドストエフスキーもこれを一種の超人と見るような、感傷的な見方はしていられなかった。あくまでこれを普通の人と見て、ニーチエのごときは、その不平の固まりが彼のごとき超人説を吐かせたのだとしていられた。このどこまでもマター・オブ・ファクトでいくものの見方は、またスウィフトと軌きを一いつにするものである。そして、この生まれついた傾向が先生を狂人

の域から救ったものではあるまいか——スウィフトはついに負けてしまったけれども。

いずれにしても、先生の晩年の「則天去私」ばかり見て、先生を円満な人格の完成者のようにいう見方には、私は与くみしえない。「則天去私」は先生の理想である。りっぱな人格者であったには相違ないが、一面においては、その晩年もなおずいぶん暗鬱あんうつな、欠陥みに充ちた日々を送られることもあった。要するに、先生の一生のトーンは陰鬱いんうつである。それでなければ、また今日戦後の日本のこの暖かい人心の間に、これだけ多くの共鳴者を見出して、

ひろく読まれることもなかろうではないか。

(昭和二十三年『芸林閒歩』第二十三号所載)





日本文学電子図書館

---

スウィフトと漱石

著 者：森田草平

制作者：宮澤一郎

底 本：「夏目漱石(一)」

講談社学術文庫、講談社

昭和60年8月8日 第2刷発行



日本文学電子図書館